

最新事情

学び合うプログラムで
学生の「気付き力」を育成する

筑紫女学園大学

(福岡県太宰府市)

筑紫女学園大学は、筑紫女学園創立80周年を機に昭和63年に開学された。同学は、自分と生命と他者を見つめることを建学の精神としており、キャリア教育にも大きな影響を与えている。その質の高いキャリア教育の取り組みについて進路支援課にお話を伺った。

就職活動に役立つ力を 「学び合い」で身に付ける

西鉄太宰府駅は、太宰府天満宮や九州国立博物館を目当てとする観光客でにぎわっている。そのにぎわいから少し離れて歩くと、見えてくるのが筑紫女学園大学のキャンパスだ。文学部、人間科学部合わせて約2000名の学生が学んでいる。

その学生たちの進路をサポートしているのが、進路支援課のスタッフだ。ここでは就職や卒業後の進路に関する相談や各種講座の申し込みを随時受け付けている他、キャリア支援としてさまざまなプログラムを考案し、実践している。

プログラムは大きく分けて2種類ある。一

つは、主に就職活動を間近に控えた3年生を対象にした「キャリアプログラム」。もう一つが、低学年から参加できる「体験プログラム」である。どちらのプログラムにも共通するキーワードは、「学び合い」だ。

進路支援課課長の井上奈美子さんは二つのプログラムの特長を次のように話す。

「時に就職指導では『自己分析をしろ』『お辞儀の仕方を覚えなさい』と型を教える方法が見受けられます。型を理解し習得できる学生もいますが、中にはそうでない学生もいます。その段階でつまづいてしまうと、就職活動に対して希望を持つことができなくなります。そこでわれわれが創造しているのは、実践知を育むプラットフォームです。具体的には、今学生が生きる現実社会に身を置き、周囲の人々と対話、交流しながら、考え、判断する場です」。

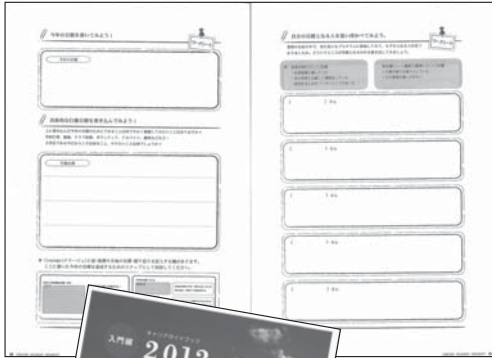
キャリアプログラムで代表的なのが「就活ワークショップ」である。「就活ワークショップ」は毎年2月に実施されており、今年は100名以上の学生が参加した。内容は「話す力を身に付ける」をテーマに、内定が決まった先輩のアドバイスを受けながら、グループに分かれて課題に取り組むというものである。

「学生は、グループで起案を企画します。自分の考えを話したり、伝える経験をすることで学びに対する姿勢が大きく変わります。他人と一緒にゼロから何かを始めるためには、人の意見を聞かなければなりません。参加する学生に

筑紫女学園大学キャンパス



進路支援課課長の
井上奈美子さん



進路支援課が作成した
1・2年生向けの
「キャリアガイドブック
入門編」



キャリアプログラム「就活ワークショップ」の様子。
「2万円でビジネスモデルをつくりなさい」
という課題に熱心に取り組む学生たち



低学年からのキャリア形成で 将来に希望を持つ

は必ず、『どんな意見でもまずは聴きなさい。そして、多様な価値観を受け入れなさい』と教えています。人の意見を聞くことで学生は、自分の視野の狭さと無知であることを突き付けられます。私は知らなかった！という思いから調べてみようと思き出す。この態度変容は他の学生と共に学び合うことで生まれます」（井上さん）。

同学では近年、低学年向けの支援事業にも力を入れている。「体験プログラム」の「学生スタッフ（学スタ）」は1年生から参加できる学内インターンシップとして平成20年度にスタートした。他の学年の仲間と共に、さまざまな経験を通して語り学び合い、社会人に必要な接遇マナー、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力など、個人のスキル向上を目指している。

学スタの学習公開の場となっているのが1年に7、8回行われる「オープンキャンパス」だ。大学見学のために来校した高校生とその保護者をアテンドし、大学生活についてプレゼンする大役を学スタが担っている。

「他大学のオープンキャンパスでは、主に教職員が前に立ち説明しますが、本学では、学生がその中心を担います。下手でもいいから挑戦する。顔を真っ赤にして、言葉につっかえながら

発表する。ありのままの姿でいいのです。まだまだ未熟かもしれない彼女たちはこうして力を養い、生まれ変わります」と話す井上さん。

実際に学スタで経験を積んだ学生は、就職活動で次々に内定が決まるという。それまで恥ずかしがり屋で人前で話すことが苦手だった学生が、就職面接で自分のことを堂々と話せるまでに成長した姿は周囲を勇気付けている。

もう一つ、低学年のキャリア教育の取り組みとして3年前から配布しているのが、『キャリアガイドブック入門編』という冊子だ。「大学生活をどう過ごすか」「卒業後の人生をいかに生きるか」が主なテーマ。社会人になる準備期間として有意義な大学生活を送ってほしい、という願いから進路支援課が作成した。

内容は就職活動に必要な情報だけではない。「将来について」「今年の目標」「自分について」「働く人にインタビュー」などの各項目にワークシートがついており、書き込みができる。「書くことで希望を持ってもらうのが一番の狙いです。学生は社会に対して、不安で怖いという思いがあります。ところが、書くために調べてみると、そこまで不安に思う必要はなかったと気が付き、希望に変わるので」（井上さん）。

独学では得られない効果を 講座で得ることができる

また、社会人としてのプロトタイプ（基本型）の学びとして資格取得も学生に勧めてお



オープンキャンパスで
プレゼンテーションをする
学生スタッフたち



学生アドバイザーの皆さん。
彼女たちは学生の悩みや
相談を聞いてサポートしてくれる



サービス接遇検定2級、
準1級に合格した菅沼かほりさん

り、数多くの講座を開講している。秘書検定講座とサービスマナー接遇検定講座もその一つ。両講座は合わせて約200名の学生が受講する人気講座だ。検定の重要性を井上さんはこう話す。「秘書検定やサービスマナー接遇検定では、社会で人

とつながるために必要なマナーや配慮の気持ちを学ぶことができます。特に秘書検定で学ぶ内容の多くは、昔は親から習っていたことばかりです。お茶の入れ方や電話のかけ方・受け方など。それらはまさにしつけです。漢字で書くこと「躰」。身を美しくすると書き、無駄がないという点でもあります。現代の日本人学生を、しつけの行き届いた人材に育てたいと思ったとき、秘書検定が最適だと思いました」。

両検定講座の指導で同学のオリジナリティを出すため、担当の先生方に井上さんをお願いすることが二つある。一つは学生が自分で考える習慣を育むこと。もう一つがなぜ学ぶのかという目的意識を持たせること。これを実現するため、授業ではディスカッションや対話を多く取り入れており、テキストに沿って一通り教えた後で対話を挟んだり、問題のどこでミスしたのかなどをクラス全体で考える時間を設けている。「知識を言葉で表すことで、常に考える癖を付けてもらいたいです。また、他の学生と一緒に勉強することは、独学では気付かない間違いに気付くというメリットもあります。マナーに関して勘違いしている部分をきちんと理解するためにも受講を勧めています」と話す井上さん。やはりここでも「学び合い」の精神が息づいているようだ。

実際に講座を受講した学生に話を聞いてみた。日本語・日本文学科4年の菅沼かほりさんは3年生の時にサービスマナー接遇検定2級に、4年

生の時に準1級に合格した。菅沼さんは洋菓子店とコンビニのアルバイトの他に、サークルではオーケストラ部の一員として活躍している。アルバイト先でもサークルでも社会人や他大学の学生と接することがあり、その時に丁寧な対応ができるようになりたいとの思いからサービスマナー接遇検定に挑戦したそうだ。

「受験を決めたものの、勉強の仕方が分からなかったので講座を受講しました。テキストを読むだけでは理解しにくいことも、丁寧に教えてもらったのでよかったです。他の学生の意見を聞いて、自分の勘違いに気付いたこともありました。例えば、丁寧であれば何でもいいというのは間違いで、相手に適した対応を考えることが重要だと学びました。今では、どうすればお客さまに喜んで買ってもらえるかを考えたり、サークルでの対人関係でも気遣いができるようになったと思います」と笑顔を見せる菅沼さん。卒業後は、通信販売会社に就職する予定だ。菅沼さんはビジネス電話検定知識A級にも合格しており、大学で学んだことを早く生かしたいと意気込んでいる。

誰もが人生について真剣に考えなくてはならない時期がある。その時に当たり、同学が展開する多種多様な取り組みは、学生に多くの「気付き」を与えている。その気付きの中から、自分に足りないものを補ったり、逆に長所を伸ばしたりしながら学生本来の強さを引き出している。そのことを強く感じた取材だった。